

シンポジウム 1

大坂の蘭学と適塾

芝 哲 夫

大阪大学名誉教授

江戸時代の大坂は天領で、藩侯のいない町人の町として日本の経済の元締め役目を果たし続けた。その特異な町の性格が文化の面でも日本の他の地には見られない独特な発展の跡を残した。中井履軒、山片蟠桃に見られる独立不羈の思想や木村兼葭堂の好奇心に徹した物産学は大坂の町人文化を特徴づける性格を形成した。自然科学の面では、麻田剛が実測に支えられた実証的な天文学をわが国ではじめて打ち立て、町人天文学者、間重富、高橋至時を輩出した。

直接に蘭文を解説する蘭学が大坂に芽生えたのは間重富の支援を受けた橋本宗吉からで、宗吉の下に医家を中心を主とする蘭学者のサロンが誕生した。宗吉は

自ら電気学に深い関心を示し、日本の実験物理学の端緒を開く活動を大坂で展開した。その影響を受けて医家の中から、伏屋素狄は腎臓が血液の濾過器官であることを西欧に先駆けて発見する真に独創的な業績を挙げている。宗吉の蘭学者グループの一人の中天游は医学のかたわら物理学にも関心を深め、わが国最初の光学の研究を始めている。

この天游の塾に十七歳で入った緒方洪庵はこの大坂の町の伝統文化の中で蘭学者としての生を享けたといえる。その後、江戸に出て蘭学の修業を完成させた洪庵は、坪井信道、宇田川榛斎を師として、江戸の地で培われていた正統の蘭学の真髄を体得した。さらに長崎に遊学して、直接に蘭人からの感化を受けて、大坂に戻って開塾した適塾は正に日本の蘭学に花開いた大輪の銘花であったといえる。

時恰も開国の危機と西欧文化の摂取の緊急性に敏感に感応したこの国のエリート青年たちが競って大坂の適塾を目指して集まり、適塾は時代の要求する人材を生み出す坩堝となったことは改めて目を見張る思いが

する。洪庵は自ら使命とする西洋医学の日本への導入に畢生の力を傾け、名著『挟氏経験遺訓』『病学通論』などを遺すとともに、種痘普及に関するわが国はじめの社会医療を実施した功績はわが国医学に大きい足跡を残した。

適塾の教育の成果は千人に及ぶ適塾門下生が明治の日本の近代化に果たした役割を見ることで十分証されるところである。ただ不思議なことにそれら優秀な適塾生たちの業績に、大坂に蘭学が入る前に育っていた自由闊達な精神に基づく自然科学上の独創的な新発見が見当たらないことである。しかし一方で、明治になって生まれた適塾の後身といえる大阪の舎密局と医学校で直接間接にオランダ人科学者の影響を受けた者の中から、真に創造的な科学研究が生まれた。最初のホルモンのアドレナリンを分離した高峰讓吉、旨味の本体の味の素を発見した池田菊苗はその若年の時代を過ごした大阪に医学校、舎密局がなければ育たなかつた人材である。

顧みると大坂の蘭学が生んだ適塾が、また日本の創

造を目指す自然科学の素地となっていたという歴史の絆を感じる。同時に適塾時代に直接になぜ創造的科學が生まれなかつたかということはこれからのこの国の科學政策を考える上で一つの課題を提供しているように思われる。